

# 若者と貧困

副田 一朗

## はじめに

ホームレス支援を始めて、25年程になる。「ホームレス」、多くの人は「家（ハウス）」を持たない路上生活者をこう呼ぶが、私は「故郷・家庭・帰るべき安住の場（ホーム）」を失っている人」と捉えながら支援活動を行ってきた。見方を変えれば、「ホーム」を失い、孤立し、相談相手を持たないからこそ、私たちのもとに相談に訪れるということでもある。この「孤独・孤立」が広がりつつある地域社会の中で、この課題に取り組んでいかなければ、「ホームレス」は増えることはあっても減ることはないだろう。

## ガンバの会とは

90年代「バブル崩壊」によって、千葉のそこかしこで見られるようになった「路上生活者」の支援を行なうために、1997年に市民運動として「市川ガンバの会」は誕生した。今も続けている「炊き出し（おにぎり）パトロール」を基礎的な活動として、関係を築くこと



を大切にしてきた。しかし、一方で文化が発達した現代日本にあって、人が大勢行き交う雑踏の傍で「路上死」の現実を目の当たりにし、1999年よりアパート入居支援も始め、これまで360名の地域生活移行の支援を行ってきた。

もつとも、ここで手放しに喜んではおられない。「地域生活」への「移行」から「定着」という課題が立ちほだかる。実際、これまでに38名の失踪者があり、そのほとんどがギャンブル・アルコール依存の問題を抱えた人、犯罪を繰り返す知的障害者であった。この他にも、独居生活のうえに、多重債務・刑余・非識字・諸障害など、自立を阻害する要因は多くあり、訪問をはじめ行政手続、通院同行、服薬支援、金銭管理支援など、「何でも屋」よろしく、今日も職員が走り廻っている。また居宅後には「孤立させない」ことを目標に、食事会・ピクニック・スポーツ大会などの交流会を開催、農園を希望者に開放、いつでも来られるスペースとしての「サロン」運営、年1回の貸し切りバスでの一泊旅行、さらに市の施設を借りて作品展なども開催している。そして、出会いから生まれた関係（ホーム）を大切にしながら、この地域で終焉の時までの関係となることを願って葬儀を行ない、この度墓地も建立し、私たちはトータルサポートを目指している。

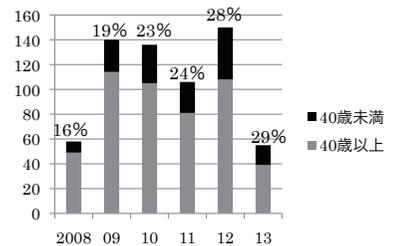
## 増加する貧困若者

こうした中、私たちのもとを相談に訪れる者の中に、ここ数年若者の割合が増え、昨年あたりから子ども連れの若い夫婦の相談も入り始めた。予想以上のスピードで、貧困が社会に浸透していることを実感している。

そして、そこにはやはり大きく二つの問題が見え隠れする。一つには「経済的困窮」の状況。2008年のリーマンショック時には「期間派遣切り」の問題がマスコミを賑わせた新卒者の就職氷河期がいまも続いていることは言うまでもないが、私たちのもとを訪れる若者の多くは、ネットカフェ等で生活しながら、「日雇い派遣」の仕事をこなしている人たちである。しかし、日雇いほど不安定なものはない。

これは今年に入っても続いている。世間ではアベノミクス効果などと言われているが、実際に「不安定雇用層」にまで効果が現れているとは言い難い。

資本主義経済構造の中で、景気の動向で振り回される「景気の安全弁」として利用される人がいて、経済構造が何とか保たれているという事実を私たちは忘れてはならないよう



来所相談者に含まれる若年者割合の推移 (2008年4月相談所開設後) \* 2013年は8月末現在



に思う。そして今、景気の動向に翻弄され、不景気になれば簡単に切り捨てられる人たちが、年々若年層化しているということである。

## 深刻化する問題

しかし、経済的問題もさることながら、問題はこれだけではない。というのも、何故に私たちのもとに支援を求めて、相談に来ざるを得ないのかということである。若年相談者の中には、最近20代前半の若者も見られるようになった。しかし、何故に彼らは、親でも兄弟でも友人にでもなく、私たちのもとに助けを求めて訪れるのか。ここに現代の若者の中に浸透しつつある、もう一つの大きな「貧困」がある。

親の暴力、若者の側の非行や犯罪、多重債務、或いは障がいなど、それぞれに理由は違うにしても、家族や友人との人間関係を失い、この社会で完全に孤立化する若者、ここに問題の深刻さがある。経済的貧困はもちろんだが、いわばこの「人間関係の貧困」を何とかしなければ、問題解決の

糸口は見えて来ないのではないだろうか。

孤立は、若者に限らず、私たち人間が生きていこうとする力を奪い取っていく。「どうせ自分ひとりのこと」で終わってしまい、誰かのために生きようとする「踏ん張り」が全くない。また具体的には、アパートを借りるにしても保証人になってくれる人がいない。

こうした状況の中で、私たちは必要な支援を提供するわけだが、たとえアパートへの入居ができ、就労先が決まり、経済的自立を果たしたとしても、そこで手放しに喜ぶわけにいかない。何故なら、彼らがこれから生きる社会は、そもそも切り捨てがあり、孤立者を生み出し、生きる力を奪っていく社会なのだから……。

## 終わりに

ガンバの会では昨年より、生活困窮家庭の子どもたちの教育支援を始めた。というのも、私たちがアパート支援を行なった人たちの学歴調査を行なったところ、下記の表のように、非常に学歴が低いことが分かった。2008年以後に居宅支援を行なった者のうち、40歳未満の若者についても、48%の人が中卒以下で

履歴書上の 記述	人数	全体比
小学卒	38名	10.8%
中学卒	206名	58.3%
高校卒以上	109名	30.9%

居宅支援を行なった者の最終学歴  
(2013年6月現在 総数353名の内訳)

あった。

今の時代は、中卒者を正規雇用者として迎えてはくれない。進学率はあがっていると言われたりするが、まだまだ中卒で社会に出て行く若者は少なくない。そして、ここでは非正規雇用の枠で、派遣労働やアルバイトで過ごす若者。しかも、一カ所の就労先に長くは続かず、職を転々としているケースが多い。そして、生活困窮に陥り、孤立の中で私たちのもとを訪れる。そのうえ、家庭環境の問題があったからか、コミュニケーション能力が低い人も多いように感じる。

こうした中で、私たちは何をなすべきだろうか。訪れる生活困窮に陥った若者の相談を受け、必要な支援を提供していく。それは確かに大切なことと思っている。しかし、若者を襲う貧困の波はとどまるところを知らず、家や仕事を奪うだけでなく、人と人の絆を引き裂いている。私はこの現実に触れながら、この日本という社会の行く末を思うと、気分が重くなる。

しかし、ここで立ち止まっておれない。引き裂かれたのなら、新たに結ぼう！ 地域社会の絆が弱くなっているのなら、新しいコミュニティをつくろう！ 私たちのもとを訪れる若者の姿を見ながら、「ホームの再創造」こそが、この日本にとって大切なことと思わされている。

（そえだ・いちろう／特定非営利活動法人 ホームレス自立支援市川ガンバの会 理事長）